

国際協力特別賞

先入観を打ちくだけ！

国立大学法人京都教育大学附属高等学校 2年

波多江 琴美

私たちは何のために学ぶのか。

私は14歳の時、父の働いているインドを訪問した。ニューデリーに到着すると、小学生ぐらいの子どもたちが信号待ちの車一台一台回って物乞いをしており、私の車にも何人もやって来た。スラム地区にいる痩せこけた子、泥まみれの床で寝ている子どもたち。驚いている私に、父が彼らは学校に行っていないと教えてくれた。インターネットで貧困について調べて、本で読んで知識としては知っていたが、それは知ったような気になっていただけだった。救いようのない貧困という現実を目の前にして、私は言葉を失ってしまった。それは一つ目の衝撃だった。

数日後、アグラで、お世辞にも綺麗と言える店舗ではないが、地元の人々に愛される青空レストランに入った。私の注文したオレンジジュースを持ってきたのは、11歳の少女だった。彼女の笑顔は輝いていて、私まで幸せな気持ちになった。彼女も学校へは行ってなかったがそう感じたのはきっと、家族を支えていることを誇りに思っていることが伝わってきたからだったと思う。どんな世界にも幸せは溢れている。私は二つ目の衝撃を受けた。ただ彼女が成長してより広い世界を見てみたいと思った時、その一步が踏み出せるのだろうかと考えると、彼女の無邪気な笑顔の分だけ私の気持ちは陰り、胸が締め付けられた。

UNISEFによると今世界では子どもの約2億6,400人が学校に通っていないことが分かっている。その数日本人口の約2倍。更に低所得国では中等教育を受けている子どもは僅か12人に1人であると言われている。勉強をしたくても出来ない子どもたちが毎日家庭を支えるために働いているのだ。それどころか自分が学校に行けるとさえ考えたことのない子どもたちも沢山いる。

学校にいけないと、所得の安定した仕事や希望する仕事につけずに、収入も少なくなる。稼ぎが少ないと、食料を十分に確保できず、病気になる傾向が強くなる。それでも、質の良い治療を受けられず、結果として子どもが働くことになる。そして、子どもは労働や金銭の問題があるため、学校に行くことができず、親と同様に貧困状態に陥る。親から子へ子から孫へと連鎖が起こり、この悪循環から抜け出すことが困難になる。貧困を生まないためには、やはり教育が必然なのだと私はインドで痛感した。学ぶことの出来る私たちはそれだけで十分幸せであり、生まれた時からたくさんの幸運に恵まれている。

その後、インドで私は父の友人宅でホームステイをさせて頂いた。家は清潔であるが質素であった。そこには私と同じ歳の中学生の娘がいた。ホームステイ二日目の夜には、彼女の親戚老若男女10名ほどが、ただ驚いているだけの非力な私に会うためだけに、わざわざ家に集まってくれて夕食会を催してくれた。折り鶴を手作りしプレゼントすると一生大切にすると伝えてくれた。インドという日本とは全く違う環境の中で、数々の衝撃を受けていた私は、親戚一同で歓迎をしてくれたその温かいもてなしから、何度も感じた衝撃を超えて、自分自身中にあった何かが崩れ去って行ったのがわかった。彼らは心が豊かで親切で、幸せそうであった。それはインドに対して自分が持って

いた先入観が崩れ去った瞬間だった。

先入観は誰しもが持っているものだ。本当の学びというのは私たちの中に植え付けられているその先入観を打ち崩すことだ。私は今、失敗する怖さに積極的に挑戦していこうと決意している。自分の中の先入観が壊されていくたびに、新しい世界が開かれると知ったからだ。また、私は周りの人々のその扉を切り開く手伝いもしたい。私という個人がどのような面で影響を与えられるかは人それぞれだが、これから出会うたくさんの人々の世界を広げられるような人間になりたい。